

弔 辞

身延山大学長 仲 澤 浩 祐

身延山学園を代表して、また先生の薫陶を受けたものの一人として宮崎英修先生の靈前に弔辞を述べさせていただきます。

昨年三月末、先生が身延山大学を退職され、翌々月の五月、ここ本高寺の客殿において本学の名誉教授の称号授与のためお伺いしたとき、さらに十一月二十四日、当本高寺の落慶法要と先生の大僧正叙任祝賀の折りにお伺いしたときは、先生がまさかこのように早く今日を迎えようとは思いませんでした。先生は立正大学を退職されてから日蓮宗現代宗教研究所長の任にありましたが、昭和六十年二月、身延山短期大学の学頭として本学園に着任されました。以来、昨平成八年三月末退職されるまで十一年間にわたって本学の教育方針である「行学二道」のもと、若き宗門子弟の教育に尽瘁されてこられました。その間昭和六十三年四月には、身延山短期大学長に就任、平成六年十二月二十三日には、文部省より身延山大学としての設置認可を得、身延山久遠寺の立教開宗七五〇年記念事業に資し、また永年の同窓生の悲願を達成されました。そしてよく平成七年四月には、初代学長として、身延山大学の陣頭指揮に当たられておりました。しかしその頃より体調を崩され、身延山病院に通院されておりましたが、二月後には入院し加療を受けることとなりました。

さらに省みれば、昭和四十四年には、日本仏教学会理事、日本印度学仏教学会評議員に就任、降って昭和六十年に

は同学会の理事としての任にあり、実に二十五年間、四半世紀の長きにわたって学会の發展興隆に寄与されました。又日蓮宗門にあつては、現代宗教研究所長、宗宝調査委員長、靈跡由緒寺院並びに修法審議会の両委員を努められました。が、殊に平成二年四月からは日蓮宗勸学院長として宗門の教學發展に意を尽くされました。

私は、立正大学、立正大学大学院そして身延山大学と三期、およそ三十五年間にわたって先生の啓咳に接し、親しく薫陶を受けてまいりましたが、さまざまな出会いを通じて先生のお人柄に触れさせていただきました。その一端を少しく紹介させていただきますが、大学院時代、妙頭寺、妙学寺等京都への宗宝調査の折り、その日の調査を終えて宿泊先となった某旅館のことですが、仲居さんの対応の悪さに先生は語気を強くされて怒られました。普段、温厚で恬淡としていらつしやる先生が怒つておられたお姿が今でも忘れられません。また酒席では、酒の飲み方から、酒席でのあり方まで教授され、時には「ヨボヨボセヨネマズラヨ」と、朝鮮の歌まで披露してくださいました。それでも私どもに泥酔した姿を見せたことがありませんでした。そして近くは身延時代、「わしゃーこの年になつて、お祖師様に毎日お給仕できることがとても嬉しいんじや」と嬉々としておられたお姿が眼前に浮かんでまいります。しかし身延山病院に頻繁に通院されるようになってからは、「身延山にいる限りお給仕するんじや。それが出来なければわしが御山にいる意味がない」とおつしやられて、激しく呼吸をされ心臓を大きく波打たせながらも朝勤に出られていたお姿が忘れられません。今となつてはまさに悲壮なまでのその時のお姿が、激しく私の胸を揺るがし、目頭を熟くするばかりでございます。さらに大学設置申請の準備に追われていた頃、連日深夜近くなる私たちを気遣い、遅くまで研究室に残つておられ、時には書類づくりの手伝いまでして下さったことが思い起こされます。いずれにしても先生の人柄や思い出をここで語り尽くすことは出来ませんが、先生と出会つてから三十五年余り、無常の理とはい

え、今ここに宗門にとつても、大学にとつても、学会にとつても大きな存在であつた先生をお送りしなければならぬことは、痛恨の思いを禁じ得ません。お別れに臨み、小生第二代の学長として先生の後を承継ぎ、開学三年目を迎えておりますが、教職員一丸となつて先生のご遺志を守り、身延山学園、身延山大学の発展興隆に邁進していくことをお誓ひ申し上げます、先生のご遺徳を慕いつつ永訣の辞といたします。

最後になりましたが、謹んで円妙の道を増されんことをお祈り申し上げます。

南無妙法蓮華經

合掌

平成九年十一月六日

(前身延山大学長・仏教学部教授)